ぱられるわーるど

翠寵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぱられるわーるど

【Ｎコード】
Ｎ１０１４Ｎ

【作者名】
翠寵

【あらすじ】
連載小説の番外短編総集編。
自作内のコラボあり。
童話や学生パロｃｐ入れ替えなんでもありな番外編。
本編では接点の無い人間関係も大きく変化します。

赤ずきん（前書き）

「魔王と勇者」番外編。
「魔王と勇者」的赤ずきんちゃん。

本編で魔王様と勇者がなかなか会えないのでここでイチャイチャ？させてみたかった。
魔王様は口調を少し崩してみました。
あと色々とおかしい。

勇者（キサラ）→赤ずきん
魔女（シュピアル）→お母さん
ブラコン（テイザ）→狼
魔王（ナトス）→おばあさん
側近（アリファス）→愉快な森の動物（赤ずきんにいるかは知らない）→
肉体派（ダヴェラ）→猟師
詐欺師（ジェリエ）→ナレーター

赤ずきん

あー、あーっ。これマイク入ってますー？
え？もう入ってる？ちょっと誰ですかー？勝手に始めたのー。

ゴホン。

えー、昔々ともいえないわりと最近のこと。
とっても天然な少年がおりました。
少年は母親からそれはそれは愛されて、軟禁されてしまうほど愛されていました。
で、母親の分身である赤ずきんを外出のときは必ずかぶせられておりました。
だからあだ名は赤ずきんですー。
女の子の格好だってさせられちゃいます。だって似合うから♪

そんなある日、母親からおつかいを頼まれましたー。

「じゃあ行ってらっしゃい、赤ずきんちゃん。」
「はい。行ってきます。」
「どうしたの？赤ずきん。」
「手を離してもらえると行けるんだけど・・・。」
「あら、ごめんなさいね。ホホホ・・・。」

おつかいを頼んだのに行かせないなんて過保護な親ですねー。
「可愛い子には旅をさせよ」って言葉知らないんですかー？
え？マイクに入っちゃいましたー？
あ、すみませんここカットでお願いしますー。

「ホホホホホホホッホ。」
「お母さん・・・・。」

母親の頭を心配しながら赤ずきんは出かけました。
ちなみにこっちの勝手なナレーションは向こうに聞こえませんー。

赤ずきんはひたすら森の中を歩いていきます。
おや、そんなところになんと下品かつ変態な狼が現れましたー。
わー超見てる怖っ・・・赤ずきん狙われてますー。
あの変態を今にも殴りかかりそうな天の声はどうしたらいいですかー？
あ、ごめんなさいー。独り言ですー。

「うまそうな少女いや、少年か？」

無駄に煌びやかな狼は、ストーカーの癖に今初めて見たようなリアクションをしましたー。
そして今日の赤ずきんのおつかい先を知っていたので先回りすることにしましたー。
本当キモイな早く始末しなきゃ健全な少年の将来が・・・・あ、すいませんー。
そう、今日のおつかいはおばあさんにお見舞いの品を届けること。
盗聴器をしかけていた狼には一発でわかりましたー。犯罪ですー。
お巡りさーん。
そんなことをしている間も赤ずきんは険しい森の道をそれはたくましく進んで行きましたー。

「そうだ、あの少年の見舞い先の婆を喰って待ち伏せしよう。」

なんということでしょう。
健全な少年では飽き足らず、老人にまで手を出そうとは卑劣な・・・
ちょ、通報したい。
しかしおばあさんというのはあだ名で、それが眉目秀麗な青年とは
狼は知りません。
僕的には返り討ちを所望したいところですねー。
おっと、そんなこんなで狼がおばあさんの家に着きましたー。
さすが変態。目的のためにならどんな不可能も可能にしましたー。
主に空間断裂。

家の中を覗くこともせずに狼はその家の扉を開け放そうとしましたー。

「そこで何をしているのです？」
「ん？誰だお前は。」
「貴方こそ何者です。早くその扉から離れなさい。」

思いがけない邪魔ものが入りましたー。いいぞもっとやれ。
その人は軽くおばあさんに付きまと・・・好意を寄せている人物でしたー。
狼の不審な行動を見て、止めに入ったようですー。まず自分をどうにかしてほしいですねー。

「ここに住んでるおばあさんの見舞いに来ただけだ。」
「おばあさん？そんなあだ名を・・・。」
「あだ名？（普通におばあさんじゃないのか。）」
「全く、あの方には似合わないあだ名ですね。誰ですか最初におばあさんなどと呼んだのは。」
「いや知らないし。もういい？」
「駄目です。今日は赤い頭巾をかぶった少年しか通してはいけない

と言いつけられております。」
「へー。（本人公認のストーカーか。いいな。）」
本人公認のストーカーなんているわけないでしょうに。
残念な頭ですねー。第一ストーカーは平然と受け入れるものじゃないですー。
それはそうとして、二人はなんと今の会話から言い争いに発展しましたー。
今の何処にそんなことにもつれ込む要素があったのか不思議ですが置いといてくださいー。
怒った「おばあさん」は二人を樹海へと投げ飛ばしましたー。

「え、なんでこんなとこに樹海あんの？！」
「これもあの御方のお力・・・はぁ、惚れ惚れ致しますね。」
「しねーよ。あとそれで納得できてるお前が怖い。」
「あの御方はなんでもできますから・・・。」
「頬染めんな。気色悪いな。」

こうして意図せずしておばあさんは自分と愛しの赤ずきんのストーカー撃退に成功しましたー。
そして変態と敬語の二人は喧嘩を続行。
結構話し合いそうなんですけどねー。
たがいに同志を罵っていますー。どっちも人のこと言えないようなことを。
もう少し言葉は選んだほうがいいと思うんですよねー。

「赤ずきん・・・・。」

一方、おばあさんは赤ずきんの到着を今か今かと待っています。
現在ダントツの一位。あ、顔立ちの良さですよー？

愛おしげに赤いずきんを握りしめています。
うわ、それだけで絵になる程綺麗ですー。誰か絵師さん呼んでくださいー。

と、そこへそれはそれは可愛らしい格好をした赤ずきんがやってきました。

「おばあさ・・・」
「赤ずきん！！！」

赤ずきんが扉を叩きながらおばあさんを呼ぶ途中でおばあさんがすごい速さで出てきました。

「赤ずきん・・・・。」
「おば、あさん。あの、怪我したって聞いたからお見舞い。」
「ありがとう。赤ずきん。上がって。」
「あ、うん。」

おばあさんは半端無い色気と甘ったるい声を出しました。
赤ずきんの名前を呼びながら髪に触れたり、ずきんで隠れた顔を下から覗きこんだりしましたー。
おばあさんが微笑むので、赤ずきんは少しぎこちなく笑います。
ちなみに赤ずきんは真っ赤になって椅子に座っていますー。
見ている方がドキドキするような雰囲気になってきましたー。

「怪我は、大丈夫？」
「ああ、赤ずきんの顔を見たからすっかり元気になった。」
「ほ、本当？」
「もちろん。」
「よかったぁ。本当は、治療の邪魔になるかもって来るの迷ってた

んだ。」

少し前までのぎこちない笑顔ではなく、満面の笑みを赤ずきんは見せましたー。
するとおばあさんは固まってしまいました。
わかりますよー。驚きと嬉しさでですよねー。
そしておばあさんは愛しい赤ずきんを優しく抱き寄せました。

「見舞いありがとう。・・・来てくれて本当に嬉しい。」
「・・・・・!!ぼ、僕も会えて嬉しい・・・です。」
「顔・・・隠さないで。」
「え、あ。いや、ずきんをかぶっていたい気分というか」
「顔を良く見せて。可愛い赤ずきん。」

おばあさんは頬を更に赤く染め上げた赤ずきんを覗き込みました。
赤ずきんは照れてしまって顔を見せようとしまいません。

「困ったな・・・・。」
「ごめんなさい、おばあさん。せっかくお見舞いに・・・」
「呼んで。」
「・・・・・へ?」
「名前で呼んで。赤ずきんちゃん。」

真剣さを滲ませた声を耳元で囁いたおばあさん。
というか本当に誰ですかー?この人におばあさんなんてあだ名つけた人は。
全然あってませんよー。ネーミングセンス大丈夫ですかねー?
あ、おばあさん・・・・が、赤ずきんちゃんに向き直りました。

「な、ナトス・・・・・?」

「キサラ・・・。」
「へいか・・おばあさん、お元気ですかー?」
まるでタイミングを見計らったかのように、猟師が扉を開け放ちました。
何してるんですか今いいところなのにー。
「あれ?もしかして俺邪魔しちゃいました?」
「上出来ですお邪魔虫!!あ、まお・・・おばあさま、怪我の方大丈夫ですか?」
「赤ずきんちゃん、喰いにきたよ?」
「「・・・・・。」」
こうして、猟師さんの働きにより、赤ずきんはおばあさんに食べられずに済みましたとさ。
「納得いかないのだが・・・。」
仕方ないですよー。むしろそれ以上いったら逆にどうしようだった感じなんでー。
あ、怒らないでくださいー。そもそも中断したのは猟師さんですしー。
「アリファス、何故止めなかった。」
「え・・・あの、私飛ばされておりましたから。」
「確かに。俺も飛ばされてたし。」
「それに先程上出来と聞こえたが?」
「や、それはですね・・・・。」
「それに関しては俺も共感した。」

そこの変態無理やり会話に入ってこようとするのやめてくださいー。
いい加減にしないと僕の権限をもって最初からいなかったことにしますよー？

「だって普通『赤ずきん』って言ったら赤ずきんと狼つまり俺だろ！」
「確かに中心人物はそこですよね。」
「どうしてそんなにどこそこが大きいの？とかいう有名なやりとりは？」
「そこ有名ですよね。」
「なのに何これ！？おばあさん！赤ずきんとおばあさんデキちゃってるの？！」
「聞いたことありませんね。」
「だろ？！しかもおばあさんなのになんかすごい綺麗な青年て！あだ名なんでもありだな！」

やめてくださいー。
それ以上言ったら収集つきませんー。

「あ、そうだこれ、お見舞いの・・・・」
「ありがとう。赤ずきんちゃん。」
「ちょ、何続けてるんだよ！！」
「狼は猟師に狩られてろ。」
「あ、そっか俺こいつ狩らなきゃ。やった俺的ベストポジ。」
「やだ俺赤ずきんちゃん食べたい。」

ダマレ変態およびじゃねーんだよ山に帰れ。
ごほっごほ、風邪のせいですかねー、何だか色々口走ってしまいますねー。

「おい、聞こえてるぞ！！」
途中から聞こえるようになってますねー。
最初は皆さんには聞こえなかったはずなんですけどー。
「え？最初からいたの？」
ええばっちり居ましたー。
あのお母さん過保護ですねー。
「わ、本当に居たんだ。」
そんなに驚かれると照れますー。
「いや褒めてねえだろ。今のは。」
「よし、狼捕獲。」
「！しまった・・・・！！」
「あとそこの森の動物もついでに。」
「ちょ・・・！何するんですか！！」
「いやこれ俺の仕事だから。」
猟師は狼も動物も連れて行ってしまいましたー。
さぁ、さっきの続きをどうぞ？
「雰囲気台無しだろう。」
「は、はは・・・。」
一行に台無しにされた空気はその後徐々に良い雰囲気に変わって行きましたー。
しかしその度にどこからか狼や森の動物がそれを遮るので結局・・・

・

おばあさんというあだ名のとても美しい青年は、愛しの赤ずきんちゃんを食べられませんでしたとさ。

その日はね♪　おしまい。

赤ずきん（後書き）

「魔王と勇者」一周年記念企画（？）
こんな感じのが気分によって無期限で増えていきます。
他作品もたぶん書きます。・・・・本当にたぶん。

うさぎとかめ（前書き）

「主人公にはなれない」（前タイトル「魔王と勇者」）番外編。「主人公にはなれない」的うさぎとかめ。

本編で出番がなかったファリオンさんをチラっとでも出したかった。その結果本当にチラッとかつ説明キャラになった。後悔はしているが反省はしていない（（キリッ今回はイチャイチャはないです。若干シリアス風味。

勇者（キサラ）→カメさん
魔女（シュヒアル）→キツネさん
細マッチョ（ウラキ）→ウサギさん
預言者の弟子（ファリオン）→オオカミさん
詐欺師（ジェリエ）→ナレーター

うさぎとかめ

あー。あっあー。
はい、マイク入りましたー。
ありがとうございますー。
あ、もう少し音量上げてくれると助かりますー。

・・・・・・。

えー。昔々？
昔っていつですかアバウトですねー。
まぁいいですー。
そんな感じのあるところある場所で。

ウサギとカメがどうやら競争をしたらしいですー。

どっちが勝ったと思いますかー？
そりゃ考えてみれば当然ウサギが勝ちますよー。
それが普通ですよねー。わかります。

でもなんと勝ったのはカメ。
ほーら言ったでしょう。
賭けは僕が大穴で当たりでしたー。
がっぽり儲けさせてもらいましたー。さすがですー。

その後？
ああ、ウサギさん村を追い出されましたよー。
一般的に知られている話ではウサギさんが名誉回復して村に戻りま

すがー。
ここでは違いますー。
ま、聞いていってくださいー。
「ウサギさん、大丈夫かな。」
「カメさーん、あのウサギが悪いのよ。カメさんは悪くないわ。」
「でも・・・キツネさん。」
審判をやったキツネさんー。
それからウサギさんに勝ったカメさんですー。
カメさんは優しいからイジワル☆ウサギさんのことも心配しますー。
「ウサギさんたぶん今頃皆から仲間外れにされちゃってるよ。」
「大丈夫よ。そんなことカメさんが気にすることないわ。」
「・・・そうかもしれないけど。僕、やっぱりウサギさんを迎えに行くよ!」
「あっ!ちょっとキサ・・・・じゃない、カメさん!!」
ちょ、本名晒しかけないでくださいー。
そういうの一番駄目ですー。
まぁそんなこんなでキサラ君ことカメさんがウラキ君ことウサギさんを探しに行きましたー。
え?なんですかー?
何も聞こえませんー。聞こえたとしても気にしませんー。
「ウサギさーん!」
「誰がウサギだっ・・・あ、今はいいのか。」
「ウサギさん!」

「・・・よぉ。カメ・・・・・さん」
ちょ、何で仮の名前で照れてるんですかー？
しっかりしてくださいよーこのヘタレ。
・・・・口が滑りましたー。

「あ、あの。ウサギさん」
「何。・・・あぁ、前のこと。笑いたきゃ笑えよ。」
「違うよ。その、あの。」

勢いで来たはいいけど言うべきことが中々でないようですー。
ありますよねー。そういうこと。
僕も昔はそんなことありましたー。
え？僕？ピッチピッチの［自主規制］歳ですー。

「僕のせいで村を追い出されちゃったって聞いたんだ。」
「誰に？キツネ？」
「あ、うん。あのだから一緒に」
「どうしろって？」

ツンツンしてますねー。
今はそれでいいかもしれませんけど後で絶対公開しますよその態度ー。
あのときはデレておくべきだった・・・ｏｒｚ
とかね☆

「その、一緒に来ない？」
「・・・・どこへ。」
「どこへでも。」

え・・・ちょ、なんですかー？これなんですかー？
プロポーズですかー？
いやそんな馬鹿な。
うふふー僕としたことが取り乱しましたー。

「・・・・・・。」
「・・・・・？」
「お前。」
「え？」

ウサギさんが後ろを向きましたー。
さすがにウサギさんも恥ずかしかったんですねー。
聞いてるこっちもなんだか恥ずかしいですー。
たぶんカメさんはプロポーズ的な意味を込めずに言ったんでしょうねー。
天然タラシ・・・成程ですー。

「お前、他の奴にも言ってんの？そういうこと。」
「？そういうことって？？」
「だから・・・・どこへでもとか。」
「うん。」
「？！！？」

わかります。わかりますよーウサギさん。
どういう形であれ衝撃は伝わりましたー。
あ、実況させていただきますとー。
まるで加速再生させたかのようにすごい速さでウサギさんが振り返りましたー。

「誰に？」

「キツネさんとか。この前君の村襲ったオオカミさんとか。」
「・・・・・」
天然タラシ恐ろしいですねー。
ウサギさんが唖然としちゃうのわかりますー。
「俺の村を襲った奴と一緒に行動しろと？」
空気がピリピリしてきましたー。
眉間の皺が濃いですー。
そんな姿で怖い顔してもギャグにしか見えませんよー。
いやだなぁー。
ほら、ウサギの耳なんてつけてそんな細マッチョなイケメンが怖い顔してみてくださいー。
ギャグでしかないですよねー。
「お前気は確かか？」
「うん。オオカミさん、今では草食だよ？」
「・・・・は？」
「前に僕と約束して。生肉にも見向きもしないよー。」
どういうことなんでしょうねー。
気になりますー。
あ、そこへオオカミさんが来ましたー。
「・・・ガオ？」
うわー。
ビックリするほどやる気ないですねー。

帰ってもいいんですよー？

「うわっ本当にいた！」

「失礼ですね。私は都市伝説ですか。」

「違うと思います。」

わー。手が燃えてますよオオカミさーん。

放火常習犯とかだったら牢屋にぶち込みますー。

本当に許せないですー。

炎はキャンプファイヤーとして円になって皆でそれを囲むからこそ美しいんですー。

なんでもかんでも燃やす炎は何も美しくないですー。

「私はまぁ、あれです。」

「どれだ。」

「簡単に言いますと、カメさんに懐柔されました。」

「はぁ？」

「カメさんが誰かを殺して食べるのはいけないと。まぁ前々からウサギを脅してそれを食べるなんてやり方あまり好みではなかったんですけど。別に木の実でも死にはしませんし。いいかな、とか思ったんです。もうアナタのお仲間は食べたりしませんよ。」

えらく説明口調ですねー。

オオカミが耳に黄色い耳飾しないでくださいー。

悪目立ちってそういうことを言うんですよー。

「それにキツネさんにも付いてくるように前々から言われていましたし。彼に同行するのはアリかなと思いまして。・・・・で？アナタはどうします？」

「どこへ行くんだ。」
「そうですね。世界の果て。なんてどうです？」
「この世界に果てなんてない。」
「じゃあそれを確かめに行こうよ。」

にっこりとカメさんがウサギさんに笑いかけますー。
昨日の敵は今日の友とも言いますよねー。
別に仲良くなってもいいと思いますー。

「俺は・・・・行かない。」
「答えは聞いてませんよ。」
「へ？」
「よし、行こうか！」

どこからともなく現れたキツネさんが右腕を。
不敵な笑みを浮かべたオオカミさんが左腕を。

がっちり両側を押さえ、ウサギさんは彼らの旅に連行・・・同行させられましたー。

「やめろおおおおおお！！」

かくして、競争から生まれた小さな友情（笑）。
それを育むべく、四つの影が西へと向かっていきましたー。

途中でたくさんの仲間が増えますー。
大所帯。
全員カメさんについて来たんですー。

ノロマと馬鹿にされていたカメさん。
でもそんなカメさんだからこそ、他人のことを深く理解できるようになったのでしたー。

わかりますかー？
人の良いところなんて見ようとしないと見れないんですー。
長い時間一緒にいても、ですー。

どれほど長くいても互いに互いを理解することはできませんー。
でも、理解しようとすることはできるんですー。
それを知るための、旅でしたー。

さて、そろそろ僕の出番ですねー。

彼らの仲間に入って、僕もたくさんのことを学ぼうと思いますー。

何かを後悔、しないうちに。

どうですかー？アナタも一緒に。

おしまい。

うさぎとかめ（後書き）

ウラキ「なぁ、この配役なんなんだ。」
ジェリエ「まぁまぁ。僕は登場人物どころかナレーター固定ですよー。」
ウラキ「最後にいいとこ持ってったじゃねぇか。」
ジェリエ「細かいこたいいんですよー。」

キサラ「カメさんの甲羅なんか重い・・・。」
シュヒアル「がんばって！」
ファリオン「なんで私がオオカミなんですか。」
シュヒアル「前回が狼あの変態だったからよ。」

ファリオン「どういう意味ですか・・・・。」

舞台裏？（前書き）

「主人公にはなれない」をラジオ風（？）でやってみました。
舞台裏シリーズ第一弾。
一応ここで二周年祝いしました。

舞台裏？

ウラキ「え？マジで？」
テイザ「おー。笑えるだろ。あ、本番で吹くなよ？」
ウラキ「ヤベェ・・・・自信ねぇわ。」
テイザ「死ぬ気で堪えろ（笑）」

シュヒアル「そこの二人、もう始まってるわよ？」
ウラキ・テイザ「「マジかＹＯ」」

久しぶりですねーこの感じ。
この、登場人物と私（作者）が一緒に出てくる感じ。

シーラ「懐かしいね～。」
タスラ「本当だね。」
アリファス「ナチュラルに始まってナチュラルに消えていったコーナーですからね。（しみじみ）」
ディジラウ「コーナーだったのか？」

コーナーだったんじゃないですかね。知りませんけど。
名前をつけるなら「舞台裏～キャラの素顔～」みたいな。

シュヒアル「ダサッ！」

知ってますよー。
どうせネーミングセンスないですよーだ。

はい、「ポカン（。口。）」としているそこのアナタ。

そして「またやっとるｗｗｗｗ」なアナタ。

この話は特に山も無ければオチもなく、また意味もないお話です。
いうなれば「もしもシリーズ」
「もしも彼らが舞台を演じているだけだったら（舞台裏）」といったところでしょうか。

シュヒアル「わかりづらっ。」

いいのです。本当に少数人は理解をしてくれたことでしょう。
まぁ、これは以前活動報告内でやっていた茶番なのですが。。。。
先日、ありがたいことに「主人公になりたい」（前「魔王陛下と勇者候補」・前々「魔王と勇者」）がなんと二周年を迎えました。

で、この番外編をあげることに！
「舞台裏」復活おめでとう！

特に最近出番が無かった諸君！
これは君たちの救済処置といっても過言ではないのだよ？感謝したま

シュヒアル「何を言ってるのかしら？早く出しなさいよ。私を！」
シーラ「ていうかこれって確か最大四人までしか参加できなかったコーナー（？）だよね？」
タスラ「あー確かに。ナレーター抜かしたら三人までが最大だったとか言ってなかったっけ？」

それはもう。
このコーナーは文字通り「舞台裏」を使って収録（？）していました。
そう、ラジオの如く！

で、今は表舞台の方を使用しています。
だから広い広い。これくらいは余裕です☆
ま。共通点は音声しかないことですかね～。

アリファス「これは音声じゃなくて文字でしょう。」
ディジラウ「たわけめ・・・・。」
ファリオン「深く突っ込まなくてもいいんじゃないですか？」
ウラキ・テイザ「「これがちょうどいい。」」
ちょ、ウラキとテイザ！本編では仲悪いくせに！いじわる！！
シュヒアル「でもこの二人どう見ても似たもの同士なのよねぇ。」
ファリオン「気が合いそうですよね。」
シーラ「舞台裏限定の友情だよね！」
タスラ「そういうものなの・・・？」
さて皆気づいたかい？
アリファス「何にですか？」
活動報告時代「舞台裏」にゲストｏｒパーソナリティ（笑）として参加した者たちのみが今ここに参加しているのだよ。
ウラキ「うわ、また意味のねーことを。」
テイザ「第一活動報告のアレ、読んでた奴なんているのかよ？」
いるといいなーいないと本当「（ °口 °）？」だよなー。

シュヒアル「調子に乗ってこんなの書き始めるからよ。」
タスラ「たぶんこれだけ人（登場人物）がいたら今これ読んでる人たち誰が誰かわからないよ。」
シーラ「ねー。頭悪いねー。」

がっでむ！！

アリファス「・・・そろそろ本題に入りませんか？」
一同「本題？？」

アリファス「今これなんの為に集まってるんですか？」
シーラ・タスラ「「わかんない。」」

はい、本題を説明します。

アリファス「随分長い前置きでしたね。」

皆まで言うな・・・。
そして戻すぞ、本題は。

二周年お祝いパーティーです！！！

テイザ「帰るか。」
一同「賛成。」

ちょ、待て。

ファリオン「第一二周年て・・・数日遅れてないですか？」
アリファス「そうですよ。今更、でしょう。」

敬語野郎ズ・・・黙っとけ・・・・・。
遅刻したことに関しては私のｏｆｆが思いのほか忙しかったことが災いしただけなんだ。

ディジラウ「結局お前か。」

ええ、ええ。そうですとも。
というか今これを書いている現在。そう、なう。

すっごいテンションが壊れていて・・・何を書いているのか私自身もわからないという罠にはまりました。

アリファス「恐らくそれは誰も仕掛けてはいませんよ？」

デスヨネー。
知ってた・・・本当は知ってたんだ・・・・この場を設けること事態がまるで意味がないことを・・・・。

ウラキ「へぇ。」

でもなんかやりたいじゃない。やらせてくれたっていいじゃない。

ファリオン「別に止めませんよ。」
シュヒアル「勝手にやってなさいよ。」

シーラ「別に」
タスラ「どうでもいい。」

優しさに包まれたいな！

ファリオン「そんなことはどうでもいいです。」

そんなことって！
ファリオン君、君ちょっと冷たいよ！
あとアリファス君とキャラ被りすぎなんだよ！

アリファス・ファリオン「「一体誰のせいだと・・・・」」

私だ（（キリッ↑効果音

アリファス「コホン（咳払い）」
ファリオン「一般的に、何周年かを迎えるとお祝いをするものなのでしょう？」

そうです。
私の場合はひっそりこっそりと。
誰に知られるでもなく。
祝福されるでも・・・なく・・・・・（言ってて悲しくなった）

シュヒアル「空気が重いわよ！」
シーラ「せっかくのお祝いなのにねー。」
タスラ「パーティーなのにねー。」

ウラキ「ご馳走ないけどな。」
テイザ「・・・・・。」
シーラ「はい先生、質問です！」
はいそこ。シーラさん。どうぞ？
シーラ「主人公（キサラ）はいつになったら来るんですか！？」
タスラ「あ、そうだよ。二周年のお祝いなんでしょ？」
ディジラウ「そうだ、魔王様は？！」
きません。
一同「え。」
来ません。
何度でも言おう、来ないよ？
ファリオン「・・・・というかいいですか？」
はいそこ。ファリオンさん。どうぞ。
ファリオン「二周年を迎えたのに未だに勇者が出ませんけど？」
一同「・・・・・。」
おー・・・・。
痛いところを突くねファリオンさん。
ファリオン「いや、師匠がちょっとほら、勇者探すみたいな描写あ

ったじゃないですか。」
アリファス「誰も覚えてないでしょうけどこれの最初のタイトル“魔王と勇者”ですよ。」

ねー。本当にねー。困ったねー。
勇者出てないどころかタイトルにあった魔王様今や影薄いもんね。
いやでも前に出そうとしてこう、本編に出す私の親心。

シュヒアル「よく言うわよ・・・・。」
テイザ「本当にな。」
ウラキ「やる気無さ過ぎるだろ。つか俺初期と大分口調違う気がする。」
シュヒアル・テイザ「「ああ・・・・。」」

なんかあれだったもんね、わがままっこぽかったもんね。

ウラキ「何だよそれ。」
シュヒアル「ある意味女王様。」
テイザ「俺ら二人共下僕扱いだしなぁ。」
ウラキ「あれ、矛先が俺に向いてる気がする。」

気じゃない。事実ですよ。ふふふ。

ウラキ「・・・・。」

そして私の力をもってしてこう。
ドーン☆
どうだ見たまえ君たち。

テイザ「何か出てきた。」

ウラキ「俺がご馳走無いとか言ったからご馳走出したんだろ。どうせ。」

どうせとはなんですか。
ほら、ね。一応お祝いだし。
で、あと記憶が正しければこの番外総集編「ぱられるわーるど」。
これは一周年記念で設置したんで・・・・えーと。

ここ自体も一周年です／（＾ω＾）／

ウラキ「うわぁ・・・・。」
テイザ「お前やらかしすぎじゃないか？」
シュヒアル「早い話一年放置してたんじゃない。」
シーラ「お祝いする気が見られない。」
タスラ「誠意が見られない。」
ディジラウ「やる気が見られない。」
アリファス「何がしたいのかわかりませんね。」
ファリオン「これ、誰向けですか？」

い、一気に言われた・・・・把握しかねる。

テイザ「あ、ワインとか出せるー？」
ディジラウ「お前一応未成年だろう。やめておけ。私たちで飲む。」
テイザ「えー・・・・。」

子供のビールみたいなのなかったっけ。
それで我慢したまえ。
ほら、出しておいたから。

ちなみにこの飲食物は魔王陛下にツケておきました。

アリファス「アナタなんてことをしてるんですかっ！」
ディジラウ「貴様・・・・！！」

いいじゃないですか。
魔界一のお金持ちですよ？
それに私からはプレゼント贈っておきましたし。
これだけじゃおつりが来るぐらいですよ。

シーラ「何贈ったの？」

キサラ君。

テイザ・ウラキ・シュヒアル「「「貴様・・・・・！！」」」

お約束ですねわかります。
いいじゃない。二人で二周年祝ってればいいじゃない。
本編では実体で会えてるんですよ？やっと。
９５部目にしてやっと。・・・・長ぇ。

ということであれは私からのささやかな実体で再会☆お祝いでもあるんですよ。

君たちはとりあえずそこでご馳走食べててください。
私は昨日焼肉食べに行ったんで別にそこまで羨ましくないんで。
あーおいしかったなぁお肉。

シュヒアル「・・・もうあいつは放っておきましょう。」
シーラ「そうだね。」

じゃあ、はい、アリファスさん。

アリファス「ワインですか。」

ガッツリ飲むっていうより香りを楽しむものですからね。
ぴったりでしょう？

アリファス「まぁ、間違ってはいませんが。」

足りないっていうんならあそこに樽ありますので。１６個程。

アリファス「私を殺す気ですか。」

人間ならまぁ間違いなくアル中とかでヤバイことになりますけど。
悪魔だから大丈夫でしょう。
無理に飲みすぎるってこともないですし。
・・・・ていうかアナタ酒豪でしょう？

アリファス「・・・・・。」

さて、次。
ディジラウさんはこれですね。

ディジラウ「シャンパンか。」

ドンペリの方がいいですか？

ディジラウ「いや、これでいい。」

シャンパンタワーとかやってみます？

ディジラウ「・・・自分でできる。」

マジすか。すげぇ側近スキルどんだけあんねん。
よっ、無駄スキル！

ディジラウ「どういう意味だ。」

さてファリオンさん。
アナタは・・・うーん、これで。

ファリオン「？これは。」

焼酎です。
日本酒とか梅酒とかその辺似合いそうだなぁと。
あ、芋焼酎とかもありますよっ。

ファリオン「そんなですかね？」

他は別にあれですけど、ファリオンさんは和風系とか似合いそうなんで。
こんど和服着せますね。

ファリオン「・・・そういうことはマトモなキャラデザ描いてから言ってくださいよ。」

お断りします☆
さて次、シーラちゃん。

シーラ「オレンジジュース！」

１００％ですよ♪
小さい頃はよく飲んでた気がします。
ということで可愛いシーラちゃんに贈呈。
おいしいよ。

シーラ「ありがとう！」

うわぁ、もう可愛い何この子可愛い。
さっさと本編出さなきゃなぁ。
さて、タスラ君。

タスラ「何？」

君にはこれ。

タスラ「ラムネ？」

そう。今はあれだからね。
お祭り。お祭り気分で飲んでくれたまえ。
折角のお祝いだし。

タスラ「お祭りかぁ。行ってみたいかも。」

甚平着ていくといいよ。
ヨーヨーつりとかいいんじゃないかな。
シーラとデートすればいいよ。

タスラ「・・・・！！なっ、何いっ・・」

いいなこれ・・・いつか番外のネタにでもしようか。
さてと、テイザ君。
君にはこれをあげよう。

テイザ「お、コーラか。」

若者にはこれだよね。
まぁ、私炭酸飲めないからよくわからないけど。

テイザ「コーラ飲めないのかw」

馬鹿にしたような笑いを止めろ。
あ、そうだ、あれだったらコーヒー牛乳とかにする？

テイザ「いやこれで。」

了解した。で、はい、シュヒアル。

シュヒアル「ちょっと。ビールじゃない。」

いやほら、君もう未成年じゃないし。

一同「え。」
シュヒアル「・・・・何バラしてんのよ。」

あれだったらマッコリとかいっとく？
それとも甘酒？

シュヒアル「ビールでいいわ。ジョッキで。」

ジョッキだとwwwwwwwww
じゃあつまみも用意しときますね。

シュヒアル「よろしくね。」

はい、次。
ウラキ君。
君はもうこれ一択でしょ。

ウラキ「・・・・・野菜ジュース。」

ウサギだしね！
ほら見て、にんじんがパッケージにあるんだぜ☆

ウラキ「お前もう嫌だ・・・・・。」

ひどいわっ親心なのにっ。

ウラキ「キメェ・・・・。」

心の底から言うのを止めてください。
お願いしますからマジで。

さて、私はカルピスで。

せーの

一同「かんぱーい！！」

舞台裏？（後書き）

こんな感じで三年目突入！

これからも「主人公にはなれない」をよろしくお願いします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1014n/

ぱられるわーるど

2011年10月9日18時09分発行